



コロナ禍で思うこと

副会長 宮崎 豊彦



私事ですが、耳鼻科には行ってはいないのですが、どうやら今年花粉症になってしまったようです。子どもの頃には、紙鉄砲の代わりに杉の実鉄砲を作って遊んでいました。杉の実を採るために杉の花粉を頭から浴びていた私に、花粉症の症状が出るとは思いませんでした。

「路」という漢字を辞書で調べると、「人や車の行き来する道。物事のすじみち」といった説明文があります。コロナ禍で人や車が行き来する“みち”は、できるだけ密を避けるために、一定の距離をとって歩く“みち”となってしまいました。この文章が掲載される頃は、新型コロナウイルスの感染が拡大しているのか、終息に向かっているのか、考えてしまいます。変異した新型コロナウイルスは感染力が高いとも言われていますので、大変心配するところです。

結婚した夫婦からの出産が主流である日本では、新型コロナウイルスの影響で婚姻数や出生数が減少する見通しだそうです。実際に令和2年度は出産を控える方が多かったようです。令和3年度の出生数はさらに減少する事が予想され、少子化が大幅に進んでいくようでもあります。特定不妊治療費助成制度の所得制限をなくした等のニュースがありましたが、少子化を止めるためにもさらなる手厚い補助や対策を打ち出してほしいと思います。子育て世帯が安心して産み育てていけるように、十分な配慮をしていただきたいです。

新聞記事に、菅首相が自民党総裁直属機関として子どもの教育や福祉・医療等を一括して所管する「こども庁」創設の検討を指示し、縦割り行政の打破を目指すとありました。「こども庁」が出来ることによって、子ども達にとっても、私達にとっても、世の中がより良い方向へ向かう事を願っております。

文部科学省では、昨年度より小学校1年生の35人学級が実施され、今後5年かけて小学校1年生から6年生までの35人学級の実現に向けて進んでいます。管轄は違いますが、私達保育園の4、5歳児の1クラス30人というのも、是非減収される事なく20人、25人等で検討していただきたいと思います。

「デジタル庁」についても4月中に法案の成立を目指し、9月に新設される予定で進んでいます。それと共に文部科学省が小学生の一人ひとりにiPad（タブレット端末）やパソコンを提供する準備をしている事もあり、時代が大きく変わる節目を迎えているような気がします。保育園、幼稚園、認定こども園等はどのように考え、変化するのか、しないのか、いろいろと考えさせられます。

新型コロナウイルス感染防止対策で、会議や研修等をリモートで行う事が増え、対面で会話する機会が非常に少なくなりました。リモートの利点はたくさんあります。しかし、時々生で相手の顔や声を見聞きする事が必要ではないかと感じています。ワクチンが接種され、特効薬が開発され、早く不安のない日常生活に戻れる事を願うばかりです。

昨年、八王子市の認定こども園で給食のブドウによる子どもの窒息死の事故がありました。その園も安全に気を配り一生懸命に教育・保育に取り組んでいたのだと思います。しかし事故というものはいつ起きるかわかりません。私達は大切な命を預かっている仕事をしています。安全・安心に気を配り、新型コロナウイルスへの感染にも気を付け、気の抜けない状態が毎日続いています。

この世に生を受けた子ども達を小学校入学まで預かっている私達保育園の果たす役割というものを、新入園児受け入れから2ヶ月が経って落ち着いてきた今、改めてもう一度考えてみる事も大切ではないかと思えます。